

【特集：忘却されざる記憶—60年後からみるマラヤ建国】

屋根を直さないこと

黄錦樹の創作におけるマラヤ共産党とその穴

及川 茜

はじめに

台湾に拠点を置くマレーシア華人文学者の黄錦樹（こう きんじゅ、Ng Kim Chew、1967- ）は、2018年3月までに8冊の短篇小説集と2冊の散文集を刊行しており、単行本に収録された作品に限ってもその数は「魯迅の字数」（黄、2015h：287）である5千字から1万3千字の間の短篇小説約100篇¹、散文66篇に上る。さらに中国語圏の近現代文学を論じた学術書を5冊上梓しており、作家としても研究者としても、質量ともに台湾において馬華文学（マレーシア華文学、後述）を代表する存在であるといえよう。

黄錦樹は1967年にマレーシアのジョホール州クラン（Kluang、居鑾）のゴム農園に生まれ、華文独立中学²である居鑾中華中学に学んだ後、1986年に大学進学のため戒嚴令解除前年の台湾に渡った。創作を始めたのは渡台後、台湾大学中国文学科在学中のことである。1989年に短篇小説「重要文書」（大卷宗）で第六期大馬旅台文学賞³の小説部門第一位を獲得した後、次々と文学賞の受賞を重ねることで台湾の文学界に地歩を固めた。学部卒業後は大学院に進学し、淡江大学と清華大学でそれぞれ中国文学の修士号と博士号を取得した後、1996年より台湾中部の南投県埔里に位置する国立暨南国際大学中国語文学科の教壇に立ちつつ創作を続けている。

文学者としての歩みにおいて、創作と文学研究が車の両輪の役割を担っていることは言を俟たない。まず指摘しておきたいのは、黄錦樹は明確に自身の作品を馬華文学の名のもとに位置づけているということである。より正確を期すなら、馬華文学の中に彼の作品が位置づけられるというより、その創作の出発点には馬華文学を構築するという野心がある

¹ 単行本の目次に掲載された作品数は101篇を数える。約100篇としたのは、複数の題名とバージョンを有する作品が、異なる題で「存目」（題名のみ収録）の形で収載される例があるためである。

² 華語を教授用語とする私立の中等学校である。政府の補助を受けず、費用は民間の寄付によってまかなわれている。杉村美紀（1990）参照。

³ 台湾のマレーシア人留学生の同郷組織「大馬青年社」の主催による文学賞。大馬青年社については陳大為（2014）参照。

というべきであろう。すなわち、創作を通じ具体的な作品によって馬華文学を充実させると同時に、研究者として文学史的に馬華文学を構築することである。それは同時に、自身で「単純に言えば、私は自分の存在の根源に深く好奇心を抱いているのだ」（黄, 2015j : 317）と述べる通り、マレーシア華人としての自己を歴史の中に位置づける行為にもつながる。

その過程において、マラヤ共産党という題材はデビュー作の「重要文書」以来繰り返し取り上げられている。とりわけ、2013年に上梓された『南洋人民共和国備忘録』（原題同じ）と、その姉妹編ともいえるべき2014年の『なお扶余を見るがごとし』（猶見扶余）の2冊の短篇小説集は、全体にマラヤ共産党の遺した歴史の空洞をめぐる記憶によって貫かれている。「なぜマラヤ共産党なのか」という問いに対し、黄錦樹は「ある程度まで、マラヤ共産党の運命は民族国家におけるあるタイプの華人の集合的な運命だといえる。それは歴史の悲劇であり、華人全体の運命をほぼ牽引していた」（黄, 2015j : 318）と説明している。

マラヤ共産党に関してはさらに、「穴およびその他について（関於漏洞及其他）」に「延長戦は気まずいものだ」（黄, 2013a : 7）と記される。ここでいう「延長戦」とは、1948年のブリッグズ・プラン（Brigg's Plan）によって華人が新村（New Village）に収容され、そのため後方支援を絶たれたマラヤ共産党が壊滅状態に陥ってから、1989年の和平協議に至るまでの期間を指す。黄錦樹は、マラヤ共産党をマレーシア政府の仮想敵のままにしておく必要ゆえに、この「延長戦」が続けられたのだと指摘し、「残るは彼らの尊厳の闘い、歴史の位置づけの闘いだ」（黄, 2013a : 7）と記している。

なお、こうした戦闘の比喩が、マラヤ共産党のみならず馬華文学の位置づけについても用いられていることには注意すべきだろう。マラヤ共産党と馬華文学はともに狭い枠の中に囚われていると指摘され、さらに次のように論じられる。

「もし突破しようとすれば、馬華文学の視野を超えて馬華文学を思考せねばならない——それはつまり、マラヤ共産党を超えてマラヤ共産党を考えることでもある。馬華文学が芭蕉の木に吹く風や椰子の樹に降る雨、方言の使用、熱帯の物語のみによっては現代の中文文学の戦場に位置を見出せず、さらにラディカルな、さらに全面的に世界文学の資源を動員する必要があるどころか、全く異なる叙述形式を編み出すことすらせねばならないように」（黄, 2015m : 184、下線部引用者）⁴。

⁴ 引用文中の「中文文学」の語について、同じ中国語による文学でも、黄錦樹は「中文」に「華文」を対置し、「中文はなめらかで滞ることなく華やかですらあるが、華文は方言土語に影響され、生硬で苦いものですらある」（黄, 2015i : 313）と見ている。「中文」が中国性と結びついた、夾雑物の除かれた純粋な中国語であれば、マレーシア華人の使用するのは方言の混じった「貧しい」（とあえて記される）「華文」でしかなくなる（黄, 2005a : 334）。なお詳しくは松浦恆雄（2011）参照。

そればかりか、書くことそのものについても「執筆とは小説であれ評論であれ、一種の持続されるゲリラ戦なのだ」(黄, 2015i: 312)と喩えられる。

すると、ここで挑まれているのは二重の闘いだということになる。一つはマラヤ共産党をめぐる言説の闘いであり、マレーシア政府ないしマラヤ共産党自身によって認められる言説に対し、華人の歴史を問うことだ。もう一つは馬華文学そのものの構築により、「中文文学」という「戦場」に馬華文学の旗印をうち立てる闘いである。

この二つの闘いが重ねられる時、マラヤ共産党が体現する「歴史の悲劇」は、歴史研究とは異なる領域で「馬華文学」の作品として記述されることになる。そこに描かれるのは正負どちらの意味においてもマラヤ共産党の直接ないし間接の影響をこうむった華人の集合的記憶であるが、それはむしろ記憶そのものよりもその痕跡、残滓、あるいはその後に遺された空洞であるといってもよいだろう。本稿では黄錦樹の創作の背景を馬華文学の構築、文学史上の父の不在、台湾で創作することの三方向から整理した上で、マラヤ共産党をめぐる記憶の不在や欠落が書かれた作品、特に1989年の「重要文書」、2013年の「父が死んだあの年」(父親死亡那年)と同年の「森からの手紙」(森林裡的来信)、2003年の「第四人称」(原題同じ)、2014年の「帰還」(归来)について、マラヤ共産党をめぐる記憶や、そのすでに復元が不可能となった空洞がどのように記されているかを検討する。

なお、「馬華文学」とは一般に「マレーシア華文文学」の略称とされるが、黄錦樹(2012a)は1991年に発表した短論で、「馬華文学」が指すのは「マレーシア華人文文学」であるべきだと提起した。マレーシア華人の使用言語は主に華文(中国語)、英語、マレー語である。華文文学は量こそ多く、華人文文学において主導的な位置を占めているものの、そのみに着目するのでは華人文文学の全貌を描き出すことはできないとの指摘である⁵。しかし、黄錦樹自身も華文によって著述を行っており、その論考で「馬華文学」として取り上げられる作品のうち多くは華文によるものである。従って、「馬華文学」の語が実際に指すのも、多くの場合マレーシア華人文文学全般ではなく、華文によって書かれた部分に限定されることは免れがたい。本稿では基本的に黄錦樹(2012a)の定義に従い「馬華文学」を「マレーシア華人文文学」の意で用いるが、混乱を避けるため、うち英語文学やマレー語文学に言及する際には特にその旨を注記するものとする。また、マレーシア華人作家の書記言語としての中国語を指す場合、本稿では黄錦樹の用語を踏襲し、「華文」を用いる⁶。

⁵ ただし「マレーシア華人文文学」の全貌を描くという試みは容易ではない。2008年に黄錦樹、張錦忠、莊華興の共編による『回到馬來亞：華馬小説七十年』(大将出版社)が刊行され、英語とマレー語による作品を含め、小説に関してはマレーシア華人文文学史の見取り図が描かれた。詩歌や散文についてはこうした試みはまだ形になっていない。

⁶ 日本語では「華文」より「華語」の方が熟した表現と思われるが、王徳威や史書美らによって近年提唱される「華語語系文学」(Sinophone literature)の術語もあり、その用いられる文脈や背景は様々ではない。ここでは混乱を避けるため「華文」を用いるものとする。なお、「中文」については前注4を参照。

引用文中の太字ないし異なるフォントが用いられる部分は原文の表記に従い、引用者が強調する場合は下線を施した。なお、引用した箇所日本語訳は特に注記のない限り引用者によるものである。

I. 父亡き後の文学

1. 再び「なぜ馬華文学か？」

馬華文学に関しては先に引いた通り、世界文学の資源を動員し新たな叙述形式を編み出さない限り、「現代の中文文学の戦場に位置を見出せ」ないと黄錦樹は見ている⁷。

馬華文学は強大な中国文学の引力から身をもぎ離そうとしてきた。その歴史の総括として、林建国（1993）「なぜ馬華文学か？」は今なお参照に値する。林建国は「馬華文学」の語を「マレーシア華文学」に限定して用いつつ、三つの問いをめぐる議論を展開した。

最初の問いは、馬華文学が自身の運命を有することを歴史的状況からどのように説明できるかであり、二つ目の問いは、馬華文学と中国文学が「対話」関係でありうるのか、また馬華文学が「主流」になりうるのかである。最後の問いは、馬華文学の運命が「中国」の文字とどう関わるのかであった。

林建国はソシュールを援用しつつ、シニフィアンたる中国の文字は中国の歴史の産物ではあるが、それ自体が中華性ないし中国性をはらむものではないと言明する。中国の「文字」が「南洋」に亡命し、そこで歴史を可能にする時、それはもはや「中国」の文字ではなく、その運命は「馬」華文学の運命に等しい。すなわち、中原の集団的意識は歴史に取って代わることはできないということである。

続いて1919年10月に溯るマラヤの中国語白話文学の出現に溯り、馬華文学の来歴⁸をたどった林建国は、「馬華文学」とはマラヤの中国語（中文）作家が彼らの歴史的状況を説明する際に生み出した概念であると指摘する。換言すれば、「馬華文学」とは早期の馬華作家による自分たちの歴史的位置の説明で、従ってマラヤの一部の人々の記憶（popular memory）の具体的な現れなのだとされる。マラヤ独立後、1969年の5月13日事件を経て、馬華文学が表すのは人々の記憶と公的な記憶との対抗である。

さらに、中国文学の辺境から域外へ伸び、不可知の暗黒地帯へと続く馬華文学に光を当てることを可能にするのは、「南洋」の、特に華人の歴史を把握することのみだと指摘される。その時、馬華文学は中国文学の視野によっては捕捉不可能な他者となり、マレーシア（大馬）の歴史に源を有するマレーシア文学となる。

⁷ この箇所について言うならば、馬華文学のうち英語やマレー語による部分は捨象されていることは言を俟たない。

⁸ 日本語で記述された馬華文学の歴史は、舩谷鋭（2004）に詳しい。

林建国が端を開いた「なぜ馬華文学か？」の問いをめぐって、黄錦樹は2013年に「塚と道——発端の再審、「なぜ馬華文学か」への再帰」（墳与路——重審開端、重返「為什麼馬華文学」）を發表し、「なぜ馬華文学か？」および林建国（2000）「方修論」に対し、林建国の馬華文学研究は自分で用いた理論によって起点に封じ込められ、道を絶たれていると批判した。黄錦樹は林建国と自身の立場の相違を、馬華リアリズム文学に対する評価の相違にあると推測した上で、自身がすぐれた作品を想定しつつ馬華文学（史）の書き替えという実践を重視するのに対し、林建国は文学史をはるかに超えるものとして「生きた人のいる場でのエクリチュールの歴史」（有活人在場的書写史）（黄，2015c：93）を想定していることを挙げている。

ただ、20年の時を隔てて見解の相違が鮮明になったとはいうものの、林建国（1993）の馬華文学の成立に対する認識は、黄錦樹が構築を試み続ける馬華文学についてもなお適用可能な部分は少なくない。早期の馬華作家の創作について林建国が指摘したのと同様、黄錦樹も作品を通じて自らの歴史的位置を模索し、公的記憶に対抗することを試みている。公的記憶とはマレーシア政府の記憶を指すと同時に、陳平の回想録『我が方の歴史』⁹に代表されるマラヤ共産党の立場から記された記憶をも指す。

前掲論文より、馬華文学に対する黄錦樹の姿勢が強く打ち出された箇所を引いておこう。

「私にとっては、20年前であろうが20年後であろうが、馬華文学が面している最も重要な問題は解釈や再解釈ではなく、書くことである。私にとっては、問題は『なぜ馬華文学を創作する必要があるのか？』に変更されねばならない。」（黄，2015c：103）

ただし、それは「馬華（地域の独自性）が文学（文学の自主性）に優先される」（黄，2015d：209）とする本質主義的立場とは一線を画すものであり、「馬華文学の中の文学は馬華を超越せねばならず、もちろん国家と国民、民族国家という論述、ナショナルな寓話を超越して、自身に属する未完の旅程に向かわねばならない」（同前：231）と語られるように、あくまで「馬華」を前提としつつも、「文学」に対する「馬華」の優越は否定される。

しかし、「馬華」を前提としつつ「馬華」を超越しようとする時、どのような文学が可能になるのだろうか？それは可能な試みなのだろうか？

2. 文学史上の父の不在

黄錦樹の文学においては「重要文書」以来繰り返し父の死あるいは不在が描かれる。

⁹ シンガポールの Media Masters より英語版の Chin Peng 《My side of history》が2003年に、中国語版の陳平『我方的歴史』が2004年に刊行されている。

その不在をめぐる語りの中でマラヤ共産党にまつわるエピソードが示されることも多い¹⁰。

これは直接父の不在として設定されるとは限らず、ゲリラ戦を戦った兄、あるいは語り手ないし主人公と血縁関係を有しない年長の男性の死亡や失踪、不在として記されることも多い。たとえば、「マラヤ人民共和国備忘録」（馬來亜人民共和国備忘録）の老金は和平条約締結後に 40 年ぶりの帰還を果たすものの、再びノートを残して行方をくらます。「魚の骨」（魚骸）（1995）では左傾の嫌疑を受けジャングルの沼地に死んだ兄と、その秘密を抱え自分を放逐するように台湾に渡った弟が描かれる¹¹。

劉淑貞（2013）は「黄錦樹の中国たる父の亡骸は、最後にはみな小説の中で風化し干からびた中国の文字と物に変わる。中国性に対する反撥ないし処理の不可能は、そうして死んだ中国の亡骸を甕に納め字と物の棺に封印せざるを得ないという結末をもたらす」（劉，2013：286）と分析している。

作中の父に中国を重ねるこうした読み方に加え、馬華文学における父／経典（キャンノン）の不在の隠喩を読みとることも可能だろう。「南方に死す」（死在南方）「M の失踪」「鄭増寿」（原題同じ）「大河の水音」（大河的水声）といった作品においては、失踪した作家の搜索が反復される。作家の失踪は父の不在へと底流でつながってゆく。

2014 年から 2015 年にかけて書かれたエッセイ「重い無」（沈重的没有）には、「馬華文学においては、私は自分の父とならねばならず、そうしない限り再び息子にはなれないのだ」（黄，2015k：190-191）と記されている¹²。

これは 1992 年に『星洲日報』に発表された短文「馬華文学の『キャンノンの不在』」（馬華文学「經典缺席」）で言明された内容を再度宣言したものにほかならない。そこでは、「煎じつめれば、馬華文学の「キャンノンの不在」の問題なのだ。これは馬華文壇／馬華文学史の悲哀であり、恐らく全ての馬華作家が開拓者のイメージを伴っているが、それはただの「開拓」に過ぎない。世界性に欠ける作品は、世界の文壇では発言権を持たず、地域の伝統も形成の条件を満たさない。現在の「馬華文学の独自性」というのは、結局のところ空集合（ $\emptyset$ ）に過ぎず、中身は非常に粗雑な技術の産物である。「粗雑」であることそのものは何ら「独自性」を称するに足るものではない」（黄，2012b：359）と断じられる。

¹⁰ 近年の『南洋人民共和国備忘録』（2013）および『なお扶余を見るが如し』に『魚』（2015）を加えた三冊に限っても、「父の死んだあの年」（父親死亡那年）（2012）、「あの年マラヤに帰って」（那年我回到馬來亞）、（2014）、「もし父が書いていたら」（2013）、「祝福」（2014）の四篇が挙げられる。

¹¹ 後日譚として「亡き兄を探して」（尋找亡兄）（2013）ではその小説中の兄と同じ境遇の投獄経験を持つ人物がいると聞き、作家が会いに行く設定が見られる。

¹² この言葉はルイ・アルチュセールの自伝に見られる「哲学においては、わたしは自分の父にならねばならない」を下敷きにしたものであることが、黄錦樹（2015o）において明かされている。

ここで予先が向けられた「開拓者」は、方北方 (1918-2007)¹³ に代表される馬華リアリズム作家であり、後に 1997 年の「馬華現実主義の実践の窮状——方北方の文章論およびマラヤ三部曲から馬華文学の独自性を論ず」(馬華現実主義的实践困境——從方北方的文論及馬來亞三部曲論馬華文学的独特性)において具体的な批判が展開されている。「いわゆる馬華リアリズムとは政治が文学場において文学生産に対して行う不自然な干渉にすぎず、その本質は非文学的で、文学そのものから文学の立場を失わせるものである。こうした誤った意識が長期にわたり馬華文壇を牛耳っており、アマチュア作家と大量の粗製濫造型の非—文学作品を次々と生み出し続け、文学を周辺化し、ひいては文学性をふみにじる文学的伝統を構成しさえした」(黄, 2012c: 108)との言においてその批判は極点に達する。馬華文学にキャンノンを認めないことは、とりも直さず自分の文学が方北方をはじめとする「馬華リアリズムの代表的作家」の系譜に位置づけられるものではないことの宣言である¹⁴。

2013 年 4 月に執筆された小説「もし父が書いていたら」(如果父親写作)でも再び馬華リアリズム作家との切断が記される。この作品は同時に「故郷シリーズの終点の一つ」(黄, 2015k: 190)であるとも自身によって位置づけられているが、マレーシア華人を取り巻く歴史と馬華文学史の両方において自らの位置を確かめる意味を有するといえよう。なぜ「もし父が書いていたら」なのかについては、次のように記される。

「私の父は 1932 年頃の生まれで、申年、日本軍がマレー半島に侵攻してきた時に 11 歳で、1942 年から 1960 年の間、つまり父の 10 歳からほぼ 30 歳までの 20 年間近くは、マラヤ共産党の活動が盛んだった時代だ。クルアンは共産党の影響下にある地域として悪名高く、父の少年時代の友人には大方ゲリラに身を投じた者がいたことだろう。言い換えれば、マラヤ共産党の物語は父の世代にとっての同時代の物語で、私のものではない

¹³ 馬華リアリズム文学について、マレーシアの文学研究者、方修 (1970) は『馬華新文学大系』序において、馬華新文学とは中国の五・四文化運動の影響を受け、マラヤ地域 (シンガポールおよびボルネオを含む) に生まれた新たな思想と精神を有する華文白話文学だと定義している。そこでは「シンガポール・マラヤおよび南洋地域の現実を反映し、南洋の色彩に富むこと」「シンガポール・マラヤ地域に密接な関係を有する現実ないし問題を反映し、直接ないし間接に現地の人民の願望を表現すること」が謳われる。方北方の作品に見られるリアリズムの手法は金進 (2012) に詳説されるが、大枠として上記の方修の定義から外れるものではない。

¹⁴ 「馬華文学のキャンノンの不在」(1992) および、先述の通り「馬華文学」は「マレーシア華文文学」ではなく「マレーシア華人文文学」の略称であるべきだと提起した『『馬華文学』正式名称を論ず』(「馬華文学」全称之商榷) (1991) の二篇の文章で論じられた問題は、それに先立つ 1990 年の小説「M の失踪」(M 的失蹤)においてすでに作品化されている。また、自動的に作品を生成できる執筆プログラムを開発し武俠小説を量産する作家を主人公にした「の外にはまた」(的外辺還有) (2013) には溫瑞安と神州詩社が投影されている。これは論文「神州：文化的ノスタルジアと内在する中国」(神州：文化鄉愁与内在中国) の小説によるもう一つのバージョンだともいえるだろう。

い。私が書くすべてのマラヤ共産党の物語は実はもし父が書いていたらそうだろうというもので、ただしあらゆるもし父が書いていたらというのは息子である自分の書いたものでしかありえない」(黄, 2015k: 190-191)

この箇所が続くのが、先に引いた「馬華文学においては、私は自分の父とならねばならず、そうしない限り再び息子にはなれないのだ」の一文である。すなわち、父の物語は息子である自身の手で生み出されねばならないことになるが、ここで黄錦樹が採った策略は一見ややねじれて見える。

この作品の中で方北方ならぬ「南方」の筆名で戯曲以外のありとあらゆるジャンルに挑んだ「父」は、「真の馬華文学リアリズム」の旗手とされる。しかし、その物語の中から黄錦樹は自らを閉め出しているのだ。

この物語の中に私はいない。父に書くことを許すためには、いくらかの犠牲が必要だ。私の十人の兄弟姉妹がもしこの小説を読んだとしたら、私があなた方もみな消してしまっただけを許してほしい。信じてくれ、私たちがいなくなった方が、彼らはいくらか幸せだろうし、父もようやく一代に名の轟く作家になれる。(黄, 2014a: 26)¹⁵

「父」が作家たることを許す文学史の中には、黄錦樹が位置を占めることはなくなる。この小説の筋立てのみに注目すれば、黄錦樹のいない世界が仮構されることにより、「父」が馬華リアリズム作家となり得たことになる。しかしこの小説は、黄錦樹自身がかつてエッセイに記した経験と吻合する書き出しで始まるメタフィクションであり、筋ではなく作品それ自体が示しているのは馬華リアリズム文学に対する批評にほかならない。この作品を書く行為そのものは、そこに書かれた内容とは逆に、リアリズム文学の否定を企図してなされているということになる。内容のみに着目するなら、そこに記されているのは「父」が馬華リアリズム作家として名声を博し死を迎えるまでの経緯にほかならず、馬華リアリズム文学の生まれた歴史および社会的背景をたどる作品と見なすことも可能であろう。しかし、表現形式の面では明らかにリアリズム文学の系譜から一線を画す。とすると、「父」が馬華リアリズム作家となり得た世界を仮構しているかのように見えるこの作品で、実際

¹⁵ 2014年の「火と霧」においても、もし子供が6人だけだったら、兄弟姉妹が全員大学に通えただろうと記し、「どう計算しても、おまえたち下の8人はそもそも余計なのだ」(黄, 2015l: 159)と綴られる。この「火と霧」は散文ではなく小説であると言明される(黄, 2015h: 287)が、冒頭に主人公の「お前」の書いたものとして「魚の骨」を想起させる小説が提示され、主人公と作者自身を重ねるよう読者を誘導しているようにすら思われる。兄や姉にとって自分が余計な存在のはずだというのは作家の実感でもあったことを窺わせるが、ただし、小説の中でその設定が用いられる時、それは家族史ではなく文学史にすり替えられていることに注目すべきであろう。

に行われているのは「父」の支配する世界には自分は存在し得ないという言明である。馬華リアリズム文学の弔いの鐘を鳴らした黄錦樹は、「父」のいない馬華文学史で自分が「父」となるという荷を負うことになる。

そして、馬華リアリズム文学の継承ではなく、前項で触れたように「馬華」を前提しつつ「馬華」を超越しようとする文学を求める時、馬華作家にとって特殊な重要性を帯びるのが台湾という土地であり、台湾留学という経験である。

3. なぜ台湾か？

黄錦樹は「二つのとるに足りないもの：馬華文学と「私の馬華文学」」(2013)の中で、マレーシア国内で馬華文学の直面する「カフカの状況」を次のように述べている。

中国語を用いることはできない（それは国を愛さない行為だ）。しかし中国語を用いないわけにもいかない（自ら奴隷となるのか？）。書くことはできない（書くことは態度を表明し、挑発することである）が、書かないわけにもいかない（黙り込むことは自殺であり、相手に服従することである）。これらの項目に、マレーシア華人という題材を書くことはできない、という項目を加えることができる（相対的にいえばそれは紋切型である。華人という題材を書けない——なぜならそれでは、国民の立場全体を反映することができず、民族主義のきらいがあるから）。その一方で、マレーシア華人という題材を書かないわけにもいかない（書かなければ、それは馬華文学ではない）。（黄，2013：120）¹⁶

マレーシア華人のうち、華文独立中学の卒業生が引き続き中国語によって高等教育を受けることを望む場合、1980年代においては台湾に留学するのが典型的なコースであった¹⁷。

¹⁶ 引用箇所は黄錦樹（2013）において「文学史という熱病」（文学史熱病）（2006）より自己引用されたものである。「文学史という熱病」は『文化研究』2期に掲載され、後に『注釈南方：黄錦樹馬華文学短論集』（2015）に収録されたが、引用箇所には出入がある。ここでは黄錦樹（2013）の記述に従う。なお、ここで触れられる「カフカの状況」については、北岡誠司（2017b）にマックス・ブロート宛カフカ書簡およびそれを典拠としたドゥルーズ／ガタリの解釈（『カフカ・マイナー文学のために』法政大学出版局、宇波彰、岩田行一訳、1978〔原書は1975〕）、さらに黄錦樹自身が黄（2015a）でエピグラフに掲げたドゥルーズ／ガタリ前掲書の異なる箇所を指摘した上での解説がある。

¹⁷ 現在マレーシア全土で中国語関連の学科を設置する大学は8校が数えられる。うち公立大学は3校（マラヤ大学、プトラ大学、スルタン・イドリス教育大学）、私立大学が2校（ラーマン大学、厦門大学マレーシア分校）、私立大学学院（民辦大学）が3校（新紀元大学学院、南方大学学院、韓江伝媒大学学院）である。なお、台湾留学生の集合的記憶に関しては、黄錦樹は台湾留学の経験を有するマレーシア人作家のエッセイを年代順に集めた『我們留台那些年』（台湾留学のあの歳月）（有人出版、2014）を張錦忠、李宗舜と共に編纂している。

そうした華人留学生のひとりとして台湾で創作の道に分け入った黄錦樹は、前掲の文章に続けて、次のように回顧している。

「ちょうど台北には、私たちが馬華文学の過去と未来を考える上で助けとなる学術的手段が、十分に用意されていた。80年代から90年代にかけては、いわゆる理論の時代だった。

(...) 当時はまだ十分に意識できていなかったが、のちに私が「馬華文学史を書き直す」と呼んだ作業の一部において、私たちは台湾における馬華文学を**発明**しつつあったのだ。」(黄, 2013: 122)

中国語による創作と発表の二つを許す環境に加え、学術面でも馬華文学の理論化を可能にする材料が台湾において用意されていたといえる。特に作品発表の条件に関しては、戒厳令解除の前年というタイミングで渡台した黄錦樹にとって、台湾の民主化が追い風となったことは言を俟たない。

マレーシアでは現在なおマラヤ共産党を題材にした著作物の刊行に制限があり、中国語出版の巨大な市場を有する中国でも同様の問題が回避できない¹⁸ことから、マレーシア華人の歴史を中国語によって作品化し、発表することは、その記述がマラヤ共産党に及ぼざるを得ない以上、ほぼ唯一台湾でのみ可能だったといえることができるだろう¹⁹。

II. 塞がれない穴

ここまで創作の背景をたどってきた。ここからは具体的作品に即し、マラヤ共産党の記

¹⁸ 山東人民出版社から2007年に刊行された自選集『死在南方』は収録作品の大幅な削除を余儀なくされ、「第四人称」「天国の裏門」(天国的後門)「我が友アブドラ」(我的朋友鴨都拉)「アッラーの御意志」(阿拉的旨意)「猿の尻、火、そして危険物」(猴屁股、火与(ママ)危険的事物)「刻まれた背中」(刻背)の六篇は「存目」として目次にタイトルのみが収められるという変則的な形を取っている。また、マレーシアでは『南洋人民共和国備忘録』は台湾での刊行後ただちに「ソフトな検閲」(軟性査禁)に遭い、正式な禁書令は出されぬままに税関で輸入を止められ、検閲の存在すら知られないようひそかに処理されたという。しかし、中国で禁じられた作品を含む『刻まれた背中』は台湾での刊行この方輸入販売は問題視されておらず、中国語出版物に対する検閲の曖昧な状況を窺わせる(黄, 2014c)。また、これらの小説作品の初出は主に台湾と香港の文芸誌である。

¹⁹ なお、馬華文学の選集は日本では〈台湾熱帯文学〉シリーズとして、国立台湾文学館(当時)の出版助成のもと、人文書院より2010-2011年に全4冊が刊行されている。収録作家は全員が現在のマレーシアの出身であるが、シリーズ名には「マレーシア」の国名は冠されていない。このシリーズで短篇集を出している黄錦樹は、次のように記している。「熱帯台湾文学とは数年前にここ[引用者注:台湾]の資源を借用して馬華文学を日本語に密航させるため、適当にこしらえたものだ。」(黄, 2015n: 91) 海外での翻訳刊行に際しても、「台湾」の名を借りて「密航」を余儀なくされる馬華文学の複雑な境遇が読み取れる。

憶をめぐる空洞、不在がどのように小説の中で示されているのかをたどって見よう。

1. 失踪と追跡、歴史の亡霊

創作のほぼ起点に位置する 1989 年の「重要文書」において、すでにその問題意識として「マレーシア華人の集合的運命」(黄, 2015m : 181) に対する黄錦樹の思考は鮮明に打ち出されている。

「重要文書」の主人公は、幼児期に父が家から連行される場面を目撃している。父はそのまま消息を絶ち、祖父もその際に窓から逃げ出して行方不明となっていた。小説は主人公がある家屋にたどり着き、それが長年自分の探し求めていた場所であることを悟る場面から始まる。歴史研究に従事する主人公は、自分が書き物をしている夢に繰り返し悩まされている。夢については幼い頃目にしていた祖父の記憶が変形したものでだろうと自分を納得させているが、他にも読んだことのない本の内容を予め知っていたり、搜索中の「重要文書」と記されたまだ見ぬ資料の特徴を具体的に挙げるができたりすることには不安を禁じ得ない。さらに、若年にして老化の兆しを知り、それどころか恐らく生殖能力を持たないであろうことを医者に告げられている。こうした奇妙な現象には、その家屋に足を踏み入れたところで説明がもたらされる。主人公は誰かが書きかけの原稿を広げたままの机に向かい、夢に見たのと同様に、筆をとって続きを書き始める。

「一時の興に任せ、私は置いてあった一本の筆を手に取り、慣れた仕草で墨をする(硯にはまだ水があった)、自分の意思とは無関係に続きの空白のます目を埋めていった。さほど考えることもなく、素早く書いていったが、筆跡はそのほかの部分となんと同じだった [。] すべての精力と注意力の焦点は、いずれも筆先にあった。あわせて 10 枚ほど書いてからわたしは筆を止め、筆を硯の上に横たえると、一種の恍惚に陥った。」(黄, 2017d : 234、下線と [] 内は引用者による)

やがて主人公は、その部屋で干からびた亡骸と、祖父の遺稿を発見し、今しがた自分の筆が記したのは、まさに自分が長年探し求めていた「重要文書」であり、すなわち祖父の回顧録の最後の部分であったと知る。彼のそれまでの 35 年間の人生は、マラヤ共産党の指導者の一人であった祖父の人生の「さほど重要でない延長で、彼の著作の最後の句点のようなもの」(同前 : 241) に過ぎず、遺稿を完成させるためにその人生は祖父によって予め「先払い」(預支) (同前 : 241) されていたのだった。彼が歩み入った家屋は未来の時空間であり、そこに見いだされた亡骸は祖父ではなく自分にほかならない。すなわち、マラヤ共産党と華人の歴史を書き継がない限り、歴史の亡霊に託された任務は完成されず、与えられた生の範囲から抜け出すことはできない。過去によって書かされているのである。

他の作品においてもこのように、消息を絶った人物の行動を主人公がなぞる行為が繰り返される。1992年の「南方に死す」では、主人公が郁達夫の行方を追い求め、その跡をたどるうちに、その筆跡を模倣し、作風を熟知して複製するまでに至る²⁰。

他方、「大河の水音」（大河的水聲）（1999）では、老作家・茅芭が謎の死を遂げた後で様々な奇妙な事態が発覚する。二人の作家・ナシルマ（納西勒馬／nasi lemak）とカチャンプテ（卡尖不爹／kacam putih）は、茅芭が死の二日前に面会したという文学史料家の鄔添財の屋敷を訪ね、コレクションを見学するうち、茅芭をはじめ馬華文学者の遺体までが収蔵されていることを知らされる。ここでは、すでに世を去った作家のみならず、まだ生きているはずの作家の遺体さえがホルマリンに漬けられて保存されている。「南方に死す」で複製されたのは作品であり、それが郁達夫の生存という、事実とは異なる歴史の可能性（反事実歴史：北岡 2017a）をもたらすが、「大河の水音」では作家の肉体が収蔵され、「偽者」（假的）（黄，2014d：104）が本人として大手を振って通行している。この偽者の来歴については触れられないが、屋敷では中国文学科の卒業生を雇い、馬華文学作品を量産しており、そうした作業に携わる一人が作家に入れかわっているのかもしれない。このとき、もはや生者と死者のいずれが本物なのかという問いは意味を失う。ガラス瓶の中で標本にされた遺体が本人のものであったとしても、その記憶を継承し本物として暮らしている生者がいるとすれば、その作家の死は認められることはない。

このように、一度姿を消した者が、本人の肉体によらず再び物語の水面に浮上するという趣向は黄錦樹の作中で繰り返し取り上げられている。ただし、それは単に別人と入れ替わるのではなく、追跡者がいつのまにか失踪者と重なってしまう、不在のはずの失踪者があたかも追跡者の肉体を操り、そこに同居するかのようなプロセスが見られることは注意を要する。このプロセスによって立ち現れてくるものは何であるのか。しかしそれを検討する前に、一人の人物の中に予め複数の可能性が与えられている例を見てみよう。ある人物の出生をめぐる謎が提示され、複数の作品の中で異なる可能性が浮かびあがる時、それは一つの事実に収斂されるべきものとしては扱われず、むしろ集合的運命としてあり得た可能性が示されている。

2. 父亡き世界の空洞、不確定性

『南洋人民共和国備忘録』の自序「穴およびその他について」（2013）には次のように記

²⁰ 北岡誠司（2017a）は「南方に死す（死在南方）」を論じ、主人公が郁達夫の筆跡をまねてテキストを作り出す行為を「没入」（immersion）および「扶鸞／扶乩」概念によって、「「私」が、郁の著作・郁関連のテキストに極度に「没入」し、その「作風[を]熟知して容易に複製できる」までに、郁と一体化したとすれば（「亡霊」の「化身」）、その「私」が「亡霊」に憑かれ、「扶鸞／扶乩」の場合のように「亡霊」の使喚のままに、郁風の文を次々と書き記した、ということにならないか」（北岡，2017：66）と説明している。

される。

「ある年、贋物のマラヤ共産党書簡集を書いてみようと思った。物語るためというより、その中の省略と穴のためというべきだろう。

今の「森からの手紙」はもともと穴だらけの—— あちこちから雨漏りする屋根のように——小説にするつもりだったが、うやむやになってしまった。」(黄, 2013: 9、下線は引用者による)

この『南洋人民共和国』と翌2014年に刊行された『なお扶余を見るがごとし』は双子のような短篇小説集で、いずれもマラヤ共産党をテーマとした物語が集められる。注目すべきは、父の死を起点とし、さらにはその不在のもとらす「穴(漏洞)」こそがテーマとなる作品「父が死んだあの年」と「もし父が書いていたら」が二つの作品集の冒頭に配されていることである。

「雨漏りする屋根」と形容される書簡体小説「森からの手紙」は、「父が死んだあの年」と関連付けて読むことも可能である。文末に付された執筆年月日は2012年6月で、2012年4月の「父が死んだあの年」に続いて著されたことが窺える。それぞれにまったく別個の作品と捉えることも可能だが、両者が互いに補い合いつつ「穴」の存在を浮き彫りにするとも考えることができる。ここではこの二作を併せて読んでみたい。

「父が死んだあの年」で、語られないことによって抉り出される歴史の「穴」は、1969年の5月13日事件にはかならない。主人公の少女阿蘭の父は、「希旦」という筆名の詩人で、事件の日には消息を絶ち、のちに森で虎に食われた亡骸が発見される。その遺体は太腿に後ろから銃弾を受けており、逃げる途中に虎に襲われたのではないかと推測されている。

父はシンガポールの南洋大学に通っていたが、学生運動に参加したため退学処分を受け、故郷に戻った後も当局から監視されていた。恋人に棄てられ、すでに肉体関係があると噂されたために縁談に恵まれなかった娘が、当局の監視下にある彼の妻となることを承知し、二人の間には阿蘭が生まれた。当局の嫌がらせを受けて職を転々とし、幾度も住居を変えるが、それでも森林に潜伏する共産ゲリラから手紙が繰り返し届けられる。「希旦」こと父からは通信していないにもかかわらず、彼の手紙への返信に擬して送られていた²¹。

事件から7日目、警察が撤退したところで、阿蘭は事件の日以来帰らない父を探しに出かける。父の恋人らしい女性の家を訪ねようとする途中、赤い帽子の男たちに輪姦される。これは「紅頭兵」こと赤いベレー帽の治安維持部隊を指すものだろう。

成長した阿蘭は小学校教諭となり、自ら望んで辺境に赴任するが、どれだけ故郷を遠く離れても誰かに見られているような感じを受ける。やがて、勤務先のフェンスの外から彼

²¹ この記述は「森からの手紙」で希旦の書いた手紙が一通も収録されないことに照応する。

女を眺める姿を職員に見とがめられたある男が、叔父だと名乗るが、阿蘭との対面は避けて姿を消す。阿蘭は小説の冒頭ではすでにこの男と性関係を持っているが、その経緯は記されない。男は全身に傷痕と刺青があり、名前も来歴も明かされることはないが、父の葬式の際にコートを着て首元を覆った姿で現れ、監視に来ていた政府の役人たちから何らかの報告を受ける姿が目撃されている。そこから彼が父の死に何らかの形で関与していること、そして阿蘭もそれを理解していることが推測される。

父の死後、阿蘭の母は再婚して家を出ていたが、その日記の燃えがらを見つけた阿蘭は、その記述から自分は母とかつての恋人との間に生まれた子だと推測する。母の引き出しから見つかった写真は、「ちょっと見たところでは父の写真かと思ったが、よく見れば別人だった」（黄 2013：40）と記される。

ここで2人の高等教育を受けた華人男性の運命が重なり、また2つに分かれるさまが明らかになる。高校卒業後、阿蘭の父はシンガポールに行き南洋大学に入学したが、左翼活動の嫌疑を受けて退学処分となった。母のかつての恋人は台湾の大学に進学し台湾で結婚した。阿蘭は2人のうちどちらの娘でもあり得たのだ。

すると、ここで描かれるのは阿蘭という個人の運命であると同時に、華人の集会的な運命でもあるということになる。父の死に対する何らかの関与が疑われる刺青の男と、阿蘭は継続的な関係を持っている。体制側の暴力によって犯され、父を奪われた過去を持つ彼女は、さらに自らの肉体を提供し、それによって喜びを得ていると解することができる。そこには自らを抑圧する存在との一種の共犯関係が成立しているとも言えるだろう。小説の最初の場面は、この男と阿蘭がベッドでむつみ合っているところで、それを壁にかかった父の写真が見つめている。

そこに異なる字体で「彼は言った。もし誰かがずっと森からきみのお父さんに手紙を寄越したりしなければ、彼も目をつけられることはなかっただろう。」（黄 2013：23）との文言が挿入される。これは回想の中の台詞のようでもあるが、刺青の男の口から出たものと理解するのが妥当であろう。

この「父の死んだあの年」の阿蘭が「森からの手紙」を提供した秀蘭と同一人物だと仮定すると²²、「父の死んだあの年」において阿蘭の視点からは見えなかった部分が浮かびあがり、彼女が刺青の男の庇護を知らぬ間に受けていたことが想像される²³。

「森からの手紙」は「整理者」を自称する「東京大学南方研究中心」の Sibekuo こと西北苦による解説から始まり、以下18通の書簡が転載される形式が採られている。書簡の

²²「秀蘭」の愛称は「阿蘭」となり得るため、両者は同名とみなしてかまわない。

²³「森からの手紙」にはムハマド・インドラ（Muhammad Indera こと Mat Indera）の口述をマレー語から訳したとされる書簡が含まれ、そこにはムハマドを狙った刺客が阿蘭とらしい少女を見初めたことが記されているが、この刺客が「父の死んだあの年」の刺青の男と同一人物であると想像しても差し支えないようである。

来源としては手紙の差出人と受取人、さらにマレーシア国立文書館の特蔵部に「Kuching Hitam08007207208800B」として保管されているファイルである。ただし、その多くは受取人である詩人「希旦」こと李光明（1934-1969）の娘、秀蘭から寄贈されたものと説明される。これらの筆跡はほとんど一致しており、もともとの書簡を筆写したものであることと、その過程で何らかの加工がなされていることが疑われる。国家檔案館の資料はさらに奇怪なもので、カーボン紙で写しとられた複製品が主であり、しかも中国語を解さない職員によって敷き写しされたとみられるものだった。書簡はいずれも原本ではなく、後から複写および加工を経たもので、もはや元の形を復元することは不可能であると示唆される。記録は記述者の手を離れた瞬間から、一人歩きを始め、転々とするうちに元の文脈を共有しない保管者によって謄写され、意味を失ってゆく。これらの残簡や断片的な記述はマラヤ共産党の記憶をめぐる穴、空洞を物体として描き出したものといえるだろう。

希旦は火にちなんだコードネームで呼ばれているが、彼に宛てて書かれた書簡の中で、最も曖昧で複数の可能性をはらむのが女性ゲリラの産んだ子供に関する部分である。花木蘭と記される女性ゲリラは、自分が身ごもったのは手紙の受取人の子だと主張するが、同志の老魏は別に手紙を書き、誰の子かは分からないが育てるようにと依頼する。これらの記述に基づくと、詩人希旦の娘・秀蘭は、森の中で武装闘争を続けていたゲリラの産んだ子だということになる。しかし、「父が死んだあの年」の阿蘭が母とかつての恋人との間の子だとほめかされる記述とは矛盾する。

「森からの手紙」冒頭の解説には「これはもともと文学ではなく、文学的な目的のもとで記されたものではなく、「無目的な目的性」のためではなく、これらが書かれたのにはもともと目的があったが、その目的は歴史の推移および書簡および差出人、受取人自身の苦難の中で（部分的に）失われ」（黄，2013e：85）たのだと強調される。こうした文言によって、逆にこれが作者の周到な意図のもとに仮構された「文学」であり、本来備わっていたはずの「目的」の流失を浮かびあがらせることこそが目的であると明かされているといえよう。

そうすると、最後に放り出されたように置かれる、他の書簡と結びつけることが困難な残簡にこそ、作家の意を汲み取るべきだろう。これは差出人も受取人も記されない断片で、男性ゲリラから妻に送ったと思しき文面である。森には入らないように勧め、相手の産んだ子ならみな認知すると綴られるが、すでに複数の子供がいることが窺える。他の書簡の中に名前が挙がっている男性は、森林に潜伏中でくりかえし手紙で指示を送る老魏、手紙の受取人である「阿火」「小火」「火」「Api」「火哥」と火にちなんだ愛称で呼ばれる男（おそらくプロメテウスを連想させる「Promé」と呼ばれる男も同一人物だろう）、マレー人ゲリラのムハマド・インドラ（Muhammad Indera）、彼を狙う刺客であり後に親友となる刀の遣い手である。残簡の書き手は彼らのうちの誰かである可能性もあるし、そうではないかもしれない。ここに「父が死んだあの年」を重ねてみると、また別の可能性が生

まれる。火と呼ばれる男が詩人希旦であるとすれば、「森からの手紙」に欠落した存在がその妻とかつての恋人ということになる。この2人の不在を埋めるのが最後の残簡だとすれば、物語の可能性はまた一つ広がることになる。すなわち、受取人は秀蘭の母で、差出人はそのかつての恋人なのだ。「父が死んだあの年」では、阿蘭の母の恋人は台湾に留学して彼女を棄てたことになっているが、それは表向きの理由で、実は森に入っていたと想像する余地も残されている。台湾留学生は作中に直接姿を現すことはなく、祖母の語りという伝聞でしか伝えられない。従って、彼が村を離れた本当の理由は読者に提示されているとはいいがたい。ことによると、共産党に身を投じて姿を消したのかもしれない。

そう考えると、革命に身を投じた男の恋人を、同志が引き取って世話をするというもう一つの物語が隠されていることになる。たとえば、2014年に著された「祝福」では、中国に「強制送還」された男がマラヤに残した妊娠中の恋人を、男の同志が妻にし、やがて産まれた娘を自分の子として育てるという設定が見られる。とはいうものの、それはあくまで想像の域を出ない。もし手紙の受取人が秀蘭の母であると仮定すれば、花木蘭と呼ばれる女性ゲリラが産んだ子はいったい誰なのかという問題が生じる。さながら一つのピースをはめると、他の部分がはまらなくなるパズルのように、行間に潜む複数の可能性は互いに矛盾を含み、あえて解決がつかないように提示されているといえるだろう。

これらの複製された書簡やその断片といった、すでに時間を経てしかも加工がなされた資料から、歴史の一つの断面をすっきりと説明のつくように組み立てることは困難である。たとえそれを補佐するひとつの物語「父が死んだあの年」が用意されているとしても、物語と書簡（もう一つの物語の可能性を示唆する）は、互いを補強するのではなく、互いの手がかりとなる部分があれば同時にそれと同じだけ互いの説得力を損なうものともなっている。

その中で人物の来歴は曖昧になり、複数の名前と呼ばれ、その人物像にも互いに矛盾するような逸話が組み入れられてゆく。それは人物の曖昧さであると同時に、複数の可能性を有する集団の記憶を再現することでもある。そして、自分に内在する／した複数の可能性を語ろうとする時、黄錦樹は「第四人称」の思考を発展させている。

3. 「第四人称」の領域

2003年の「第四人称」は、華文独立中学の卒業生のマレーシア社会における窮境を背景にした小説で、単行本『土と火』（2005）収録時に、廖宏強の「失落的年代」（2004）が付されている。廖は黄錦樹の高校の同級生であり、作中人物の一人は彼をモデルとしたらしい。彼はこの小説について、「中盤から終盤にかけて多くの字数が費やされ、大量に積み上げられた学者の理論と、難解な措辞で、「わたし」のアイデンティティが大きく語られている。才筆をひけらかすこと以上の背後の隠喩は、一般人には恐らく読み取れないだろう。わたしにとっては、あるいは同様の経験を持つ者にとっては、その魂の遍歴の

変化は文字によって形容されうるものではない」(廖, 2005: 279)と解説している。

小説の中では、「なぜ全ての言語は多くとも三つの人称のみで、それ以上にはならないのか、たとえば四つの人称のように？」(黄, 2005b: 268)という同級生がかつて提起した疑問に対し、語り手は積年の思索の結果を次のように語る。二人称の「あなた」は超越者の位置であり神の位格であり、ひいては他者の位置でもあるが、「かれ」の領域ではない。フロイトは「イド(本我)」を三人称の無人称エス(das Es)によって指し示したが、とすると「かれ(它、das Es)」は内在する「非我」すなわち「あなた」であるのかという疑問が生じる。しかし他方、ラカンが主体の形成に際し、「エスの顕在化した姿(本我之顕相)」(同前: 270)である「第四者」、主体が自己と誤認している鏡像、すなわち自己の幻影を引き出す。すると、神学的な「あなた——わたし」という構造は、精神分析の「わたし——かれ」に取って代わられる。この「かれ」は外在する客体や他者の世界ではなく、「わたし」の構造に内在するものであり、「わたし」と口にする人は同時に自身および(あの深く隠されて知ることができない)かれを指し示さないことはできない」(同前: 270)との論が展開される。すなわち、「わたし」と自らを名指す時、常に同時に、鏡に映った自分の姿であり「エスの顕在化した姿」である「かれ」も指し示されているということになる。

マラヤ共産党を扱った作品のうち、やや錯綜した複雑な構造を持つのが2014年の小説「帰還」²⁴である。この作品の読解においては、「第四人称」で展開された議論を前提とする必要がある。主要な作中人物の「叔父」(二舅)が一人称で主人公の「お前」(你)に対して語りかける時、そこには常に「(あの深く隠されて知ることができない)かれ」の存在も示されている。この「第四者」の領域を言葉によって表すため、小説内にはいくつかの仕掛けが施されている。

この小説は、主人公の「お前」(你)が叔父(二舅)から預かり、死後に開けるようにと頼まれた古いトランクの中身をめぐり語りを主軸として整理できよう。トランクの中には黄色い包みが二つ入っていたが、その来歴についてはいずれも叔父の口から三つのバージョンが示される。叔父は若い頃、妊娠中の妻を載せたトラックを走らせているところで事故を起こし、近くのマレー人のカンボン(集落)で呪術医の夫婦に救われたものの、お腹の子は守れなかったという。この事件自体は、「お前」の母(叔父の姉)が呪術医のその後について語っていることから、叔父の作り話ではなく、物語の中では事実として認められていると見てよいだろう。

包みの来歴についての最初の説明は、事故の後で呪術医からこの包みを渡され、大事に保存するように、しかし開けてはならないと言われたというものである。二つ目は、昏睡

²⁴ なお、この作品については「辛」という同名の少年の登場する「拿督公」との関係から、西端彩(2016)「黄錦樹「拿督公(雨聲)」「歸來」について：日本(軍)表象の視点からの考察」において論じられている。

状態に陥った妻の傍らで叔父が夢を見、ある声の導きに従って神像のようなものを2体布にくるんで持ち出したというものだ。最後の一つは、中国の古沈没船の木材と称する木を買いとり、死産した子の代わりに男の赤ん坊の像を彫って妻に贈り、自分には女兒の像を彫ったのだという。恐らく主人公は最後のバージョンを事実として受けとめるのだが、他の二つのバージョンについても、その語りが生じる理由が作中にはほのめかされている。

この叔父の語りが信用できないものであると冒頭で示されていることは注意に値する。叔父のほら吹きぶりを示す複数の逸話に加え、「お前」の母の言による「1枚の葉を林にし、1枚の羽根を1羽の鶏にしまう」（黄、2016：54）ほど話がうまいとの評が引かれることで、読者には叔父の話は小説内の事実から懸隔があるとの予想がもたらされる。だが、この母の言葉は同時に、叔父の話がまったく根も葉もないものではなく、少なくとも元になる「1枚の葉」「1枚の羽根」があることを示している。後には「絶えず作り話をういて遠回しに訴えていた」（同前：66）と記され、「お前」は叔父が荒唐無稽に聞こえる物語にかこつけて何かを伝えようとしていたと解釈する。叔父のいかにも作り話めいた語りの中に忍びこんでいるのが、小説「第四人称」でその存在が前景化された「第四者」の存在である。

まず、夢の中に現れたとされるマラヤ共産党の女性ゲリラが「第四者」として像を結ぶ。叔父は女性ゲリラにまつわる二つの夢と一つの逸話を語る。

最初の夢は、事故の際に昏睡状態に陥った妻が見たものである。叔父は後年になって妻から聞いたとしてその夢を語る。妻の夢の中で、叔父はほかの女と結婚して子供をもうけており、妻は憤怒の余り山に入り共産ゲリラに身を投じた。しかし夫を忘れかねたまま山中で数十年の時が過ぎ、ある日、政府軍の襲撃で背中を撃たれてしまう。妻はマレー・カンボンに逃げ込み、見覚えのあるマレー人老女に手招きされたところで目が覚め、すべては夢であったと知ったという。

しかし、女性ゲリラについては「お前」が最後に叔父に会った時、その口からまた別の逸話が語られる。叔父はゴム林で若い女性の写真を拾い、それからというものの夢にその娘の姿を見るようになり、さらに数々の不運に見舞われた。廟の道士には女の幽霊に取り憑かれていると言われたため、写真の娘が英国兵に殺されたマラヤ共産党員であることを突きとめ、冥婚を執り行ったという。ただし、この話を語った時、叔父はすでに人の顔を見分けることもおぼつかなくなっていたのに加え、小説内の事実である妻の存在とは相容れず、叔父はまるで妻と結婚したことなどなかったかのような口ぶりであるため、「お前」は奇異な感じを受ける。ここで叔父は「お前」に女の写真を見せており、「お前」は冥婚譚の真偽は別として、叔父に愛人がいたという噂は本当だったのかもしれないと解釈する。

叔父の葬式の後、母は弟のほかにもう一人、幼くして日本兵に虐殺された「辛」という名の兄がいたことを語る。叔父はそもそも捨て子で、両親は辛の「靈魂がこうした方法で帰還したもの」とみなした（中略）。死んだ者について語ろうとしなければ、彼は死んでな

どいないかのようだ。」(同前:66)として、死んだ息子の代わりとして育てていたのだった。叔父も自分が養子だと察していたが直接口に出すことはなく、夢にかこつけて、自分が長年にわたり死者の姿を重ねられ、その存在を感じながら暮らしてきたことを語ったのである。それが女性ゲリラと関連するもう一つの夢となる。

事故の後、昏睡状態の妻と同時に、マレー人の集落で叔父も長い長い夢を見た。夢の中では妻を救うため、ある声に導かれるままに地下室に忍びこみ、壁龕に納められた神像のようなものを二体盗み出す。しかしそこで「もうひとり捉まえたわ」という声を耳にし、そのまま身体が動かなくなり、壁に祀られた死者の肖像画の中に封じ込められる。そして数十年の月日が流れた頃、彼を自由にしよう祈る妻の声が聞こえ、持ち出そうとした像がまだ自分の腕の中にあったことに気づく。しかしそこで眠りに落ち、掛け軸ごと女の脇に抱えられて走っている夢を見るが、銃声が聞こえ、女は倒れてしまう。その夢から目覚めると、叔父はマレー・カンボンの入口にいた。黄色い包みを差し出すと、そこから若い娘の写真が落ちる。

この二重の夢の中で、まだ若い父が小さな男の子の手を引いている肖像画を目にしたと叔父は語り、母が自分を産んだのはもう40歳に近い年齢だった筈なのにと訝しく思ったという。中国には故人となった家族の肖像画を祀る旧習があるが²⁵、この男の子が死んだ兄の辛の姿であることは容易に想像がつく。叔父はこの語りの中で、自分が出生の秘密を知っていることをほのめかしている。

叔父の語りを通じ、叔父の人生には見ず知らずの血のつながらない兄の存在が重ねられていること、そして妻には起こり得たもう一つの人生としてマラヤ共産党員の少女が重ねられていることが読み取れる。こうしたもう一つのあり得たかもしれない人生は、あたかも自分の中にいるもう1人の自分のように、夢に仮託することによって初めて語りの中に姿を現すことができる。あるいは、信頼できない語り手である叔父の、死を前にして人の顔を見分けることもおぼつかなくなった時期の語りという仕掛けを通じて、物語の表面に姿を浮かびあがらせる。前節では「重要文書」において登場人物の肉体が祖父によって使用され、あたかも肉体に祖父が同居するかのようにしてその遺著を完成させるところを見たが、ここでは夢が二つの異なる人生を重ねる働きを有している。消えてしまった少年と少女は、一人称で自らについて語るすべを失っている。彼らの人生の痕跡は、こうした語りの仕掛けを通じ、小説「第四人称」で論じられた領域において浮上するのだ。

おわりに

ここに取り上げた作品は、馬華リアリズム文学を継承しない馬華文学の創作という明確

²⁵ 小川陽一 (2005)『中国の肖像画文学』研文出版。

な目的意識のもとに展開された、「馬華」を前提としつつ「馬華」を超越する黄錦樹の試みの実践として読むことができるだろう。

従って、作中ではマラヤ共産党の記憶がリアリズムの手法で描かれるのではなく、その記憶の欠如、不在、ピースの欠けたジグソーパズルのように不完全な部分、あるいは互いに矛盾をきたす複数の可能性が文字によって表されている。創作はその穴を埋め戻し、復元する試みとしてではなく、穴が穴であることを提示するものである。そこでは様々な文学的技法が動員されるが、本稿に取り上げたのはごく一例にすぎない。

「森からの手紙」の創作意図を説明した「雨漏りする屋根」との比喻は、その不完全性を指すものであるように受け取れるが、あるいは覆いをしようとしても雨漏りのように忍びこんでくる記憶の隠喩としても読むことができるのではないか。

そしてその集合的記憶は、あるいはあたかも登場人物にとりつくように二重写しとなって表れ、あるいは肉体に同居するかのように忍びこむことによって複数の可能性として提示され、他者ではなく一人称の「わたし」に内在する「かれ」、すなわち第四人称の探求によってはじめて水面に浮かびあがるのである。

参考文献

【日本語】

小川陽一（2005）『中国の肖像画文学』研文出版。

北岡誠司（2014）「黄錦樹「南方に死す」の様々な小説作法論」『野草』第 93 号。

———（2017a）「黄錦樹「死在南方」「叙事」部——「反事実歴史小説」」『野草』99 号。

———（2017b）「黄錦樹「カフカの状況」への評釈補正——カフカ「手紙」（1921）とドゥルーズ／ガタリ『カフカ』（1975）」『中国文芸研究会会報』第 426 号。

黄錦樹（2013）「二つのとるに足りないもの：馬華文学と「私の馬華文学」」大東和重訳注、『野草』第 92 号。

杉村美紀「マレーシアの国民教育政策と「華文独立中学」」『日本比較教育学会紀要』第 16 号。

陳映真（1991）「山道」『台湾現代小説選 3 三本足の馬』研文出版（岡崎郁子訳）。

舩谷鋭（2004）「華人文学研究の歴史と現状.マレーシア、シンガポールの華語系華人文学について」『境外の文化：環太平洋圏の華人文学』（山田敬三編）汲古書院。

松浦恒雄（2011）「解説——黄錦樹の華語コンプレックス」『夢と豚と黎明——黄錦樹作品集』人文書院。

西端彩（2016）「黄錦樹「拿督公（雨聲）」「歸来」について：日本（軍）表象の視点からの考察」『日本中国当代文学研究会会報』第 30 号。

【中国語】

陳大為 (2014)「一九九〇，在台湾」『我們留台那些年』有人出版。

金進 (2012)「動亂時代的人性激流——試論方北方作品中的人道主義情懷」『爸爸過劫——方北方小說選集』釀出版。

陳映真 (1996)『夜行貨車』時事出版社。(1983 初出)

方修 (1970)『馬華新文学大系』星州世界書局。

黃錦樹・張錦忠・莊華興編 (2008)『回到馬來亞：華馬小說七十年』大將出版社。

黃錦樹・張錦忠・黃俊麟編 (2013)『故事總要開始——馬華當代小說選 (2001-2012)』寶瓶文化。

黃錦樹・張錦忠・李宗舜 (2014)『我們留台那些年』有人出版。

黃錦樹 (2005a)「華文的遭遇」『土与火』麦田。(1993 初出)

—— (2005b)「第四人称」『土与火』麦田。(2003 初出)

—— (2006)「文学史熱病」『文化研究』2 期。

—— (2012a)「「馬華文学」全稱之商榷」『馬華文学与中国性 增訂版』麦田。(1991 初出)

—— (2012b)「馬華文学「經典缺席」」『馬華文学与中国性 增訂版』麦田。(1992 初出)

—— (2012c)「馬華現實主義的實踐困境——從方北方的文論及馬來亞三部曲論馬華文学的独特性」『馬華文学与中国性 增訂版』麦田。(1997 初出)

—— (2012d)「神州：文化鄉愁与内在中国」『馬華文学与中国性』麦田。(1993 初出)

—— (2013a)「關於漏洞及其他」『南洋人民共和国備忘錄』聯經。

—— (2013b)「父親死亡那年」『南洋人民共和国備忘錄』聯經。

—— (2013c)「那年我回到馬來亞」『南洋人民共和国備忘錄』聯經。

—— (2013d)「馬來亞人民共和国備忘錄」『南洋人民共和国備忘錄』聯經。

—— (2013e)「森林裡的來信」『南洋人民共和国備忘錄』聯經。

—— (2013f)「尋找亡兄」『南洋人民共和国備忘錄』聯經。

—— (2013g)「凄慘的無言的嘴」『南洋人民共和国備忘錄』聯經。

—— (2013h)「在港墮」『南洋人民共和国備忘錄』聯經。

—— (2014a)「如果父親寫作」『猶見扶余』麦田。

—— (2014b)「的外邊還有」『猶見扶余』麦田。(2013 初出)

—— (2014c)「沒有查禁——我那既被禁又沒被禁的新小說集」『猶見扶余』麦田。

—— (2014d)「大河的水聲」『刻背』1999 初出)

—— (2014e)「猴屁股、火及危險事物」『刻背』(2000 初出)

—— (2015a)「華文少数文学」『華文小文学的馬來西亞個案』麦田。

—— (2015b)「另類租借，境外中文，現代性」『華文小文学的馬來西亞個案』麦田。

—— (2015c)「墳与路——重審開端、重返「為什麼馬華文学」」『華文小文学的馬來西亞個案』麦田。(2013 初出)

- (2015d) 「馬華文学の国籍 —— 論馬華文学与（国家）民族主義」『華文小文学の馬來西亜個案』麦田。（2006 初出）
- (2015e) 「祝福」『魚』INK 印刻文学。（2014 初出）
- (2015f) 「山路」『魚』INK 印刻文学。
- (2015g) 「隱遁者」『魚』INK 印刻文学。
- (2015h) 「巡遊在湖海之間」『魚』INK 印刻文学。
- (2015i) 「小說能做什麼？」『魚』INK 印刻文学。（2013 初出）
- (2015j) 「写在家國之外」『魚』INK 印刻文学。
- (2015k) 「沈重的没有」『火笑了』麦田。
- (2015l) 「火与霧」『魚』INK 印刻文学。（2013 初出）
- (2015m) 「火笑了」『火笑了』麦田。（2014 初出）
- (2015n) 「柳丁与番茄」『火笑了』麦田。
- (2015o) 「在語言裡重生」『註釈南方 —— 馬華文学短論集』有人出版社。（2014 初出）
- (2016) 「婦来」『雨』宝瓶。（2014 初出）
- (2017a) 「死在南方」『烏暗暝』麦田。（1994 初出）
- (2017b) 「鄭增寿」『烏暗暝』麦田。（1992 初出）
- (2017c) 「M 的失蹤」『烏暗暝』麦田。（1990 初出）
- (2017d) 「大卷宗」『烏暗暝』麦田。（1989 初出）
- (2017e) 「魚骸」『烏暗暝』麦田。（1995 初出）
- 廖宏強 (2005) 「失落的一代」『土与火』麦田。（2004 初出）
- 林建国 (1993) 「為什麼馬華文学？」『中外文学』21 卷 10 号。
- (2000) 「方修論」『中外文学』29 卷 4 期。
- 劉淑貞 (2013) 「倫理的帰返 —— 黃錦樹和他的中文現代主義隊伍」『南洋人民共和国備忘録』聯經。
- 七等生 (2000) 「隱遁者」『七等生全集 5 沙河悲歌』遠景。（1976 初出）

（おいかわ・あかね 神田外語大学）